



猫天使



木住 和

最下位の朝

『ごめんなさい！今日の最下位は射手座のあなた！！』

朝のひとつき。

食卓にはご飯、目玉焼き、味噌汁という、ごく一般的とも言える朝食を、箸でちょいちょいと突きながら朝のニュース番組をぼうっと見る、というのが彼女——行橋ゆきはしいちるの日常だった。

当然、見る番組は固定だが、この時間はどのチャンネルを回しても占いをやっているという日本の不思議を、抵抗もなく受け入れているものの、朝から『ごめんなさい』だの『最下位』だの言われると、話半分に聞いていたって気分は良くない。

謝るくらいなら、占うな！！

いちるはそもそも、朝の時間の変わり目にあるたった数分の簡易占いを信じてはいない。ただぼうっと聞くだけであるが、それでも人はその内容で一喜一憂してしまうのだ。責任をとれ、占い師よ。

と、朝から顔も知らない占い師に心の中で愚痴を言う。

『でも射手座のあなた、今日のラッキーアイテムは猫のおきものよ！』

最下位と落とした直後の持ち上げはなんの意味もなさない。

なんだよ、猫のおきものって。せめてぬいぐるみとかキーホルダーとか……。

そして行橋家には猫のおきものなどない。これから行く学校には勿論のこと、断じて身近にあるものではない。どうしてこういう結果が出てくるのか、気になるものである。

気になるものであるのだが、いちるの占いを信じない性格はこの結果をさらりと忘れてしまう。朝食を食べ終わって、家を出ることには自分が最下位であることすらも忘れる。

でも何故かこの日は忘れなかった。

占い直後のCMでは、今期から始まるドラマの番宣がすぐに流れた。

『あなたは——、親友のために命を賭けることができますか？』

主演女優が真剣なまなざしでこちらを見ている。なんだか最近では小説でも映画でも、重い内容のものが流行っているようで、キャッチフレーズだけ聴くとこれがまた重々しい。だけれど、この命題は如何なものだろう？とまたまた考えてしまういちるである。今朝はなかなか頭が冴えている。

命を賭けるってどういう状況？

まずそこが問題。目の前で親友が交通事故にでも遭いそうになっているところをとっさに救うのか。難病を抱えている友人がいて、自分は医者を目指すのか。戦争区域にいて、友人が射殺されそうな状況にあるのか。

どれをとっても頻発する事象でもないから、その状況で自分がどんな行動をとるかなんて、想像の域を出ない。

そこで例を一つに絞ってみる。

例えば、友人が目の前で無差別殺人鬼に襲われそうだとか、居眠り運転のトラックが突っ込んできそうだとか、とにかく友人は命の危機で、自分はもしかしたらそれを救えるかもしれない位置にいるとする。

自分は、友人を押し飛ばして殺人鬼もしくはトラックのまえに我が身を差し出すことが出来るか。

結果は—————わからない。

あまりにも突然のことで動けないかもしれない。

いや、もしかしたら反射的に動いてしまうかもしれない。

いやいや、そもそも自分という存在はそこまで出来た人間ではない。自分の命を犠牲にするかと言ったら、相手がたとえ無二の親友であっても、自分を選ぶのではなからうか。

どれも考えられるし、前者の二つはあまりにもドラマや小説でありがちであるが、実際は我が身かわいさに自分をとるだろう、といちる自身は思う。

だって、自己犠牲を払ってまで成し遂げたい何かなど、自分が犠牲になっている時点で『成し遂げた』など言えるのか。やはり、自分資本である。他人が犠牲になったら、その分を自分が補えばいい。そう、思うってしまうのだ。

これって間違い？

このいちるの問いかけに答えられる人は、この世に一人もいないだろう。

「行ってきます！」

朝、決まった時間に起き、決まったニュース番組を見、決まった時間に家を出る。

滑り出しは順調。平和な朝、といっても過言ではないのではないか。そうすると、やはり『最下位』という朝の簡易占いは当てにならないわけで……。

と朝から不毛な勘定をするいちるである。

そもそも、星座占いなんかがこの世で成立してしまうことを考えよう。すると、世の中の人間は十二種類のタイプに分かれる。（ただし、十二星座占いに限る話だけれど。）

日本の人口を約一億二千万人とした場合、単純計算で射手座は一千万人。すると、今日というこの日、運勢最悪な人は一千万人もいることになる。そして一千万人の人が猫のおきものを必要としている。なんとも不可思議で不気味な現象である。

いや、占いは星座だけでない。別のチャンネルを回すと血液型占いもある。これも単純に、四種類の血液人口が同じ割合で分布しているとする。十二星座も併せて考えると、運勢が最凶最悪な人は日本に二百五十万人。これでもまだ多い。

さらに干支で十二種類に分け……、

と登校中の電車の中は暇なので、こんな計算をしたりして暇をつぶすのもいちるの日課である。これは数字遊びや言葉遊びが好きないちるなりの暇のつぶし方だ。

電車に乗ると、よく切符に印刷されている四桁の数字でいろんな四則演算をしてみたり、最近読んだ本のタイトルを一文字ずつばらばらにして並び替え、新しい言葉が出来ないかと考えてみたり。面白いのだが、なかなか共感を得ない一人遊びである。

この日は、ひたすら占いに関しての計算を続けていった。最近では、朝の占いで名前占いなどやっている番組もあるから、計算のしがいはあるが、血液など明らかに偏りがあるものをすべて均等として考えているから、この部分は改善しなきゃなあ、などと思っているうちに降りる駅に着いてた。

いちるが通う高校は、交通の便が良い駅にある割に、そこから十分ほど歩かねばならないところが苦である。しかも、駅前是人通りおよび通行量が多い。駅を降りてしばらく行った県道では、車通勤をする人がよく通るのか、この時間はひっきりなしに車が通る。

そして、信号前で待つ高校生も多い。

いちるはタイミング悪く、赤になった直後に横断歩道の前に着いたから、信号待ちの集団は道路の向こう側に移動していて、いちるはぽつんと対岸に残ったような形になった。この信号はこの時間、車びいきで歩行者側の信号が青に変わるまで少し時間がかかる。だから、このタイミングの悪さにいちるは舌打ちしたい気分だった。

案外、朝の占いは当たってるのかもしれない。

車側の信号が青に変わって、先頭の車がエンジンをふかすブロロロ、という音が聞こえた。そのとき――、

高校生集団が渡った道路の対岸から、一匹の茶色い猫が走ってきた。

おお、割と小さい。子猫とまでは行かないけど、まだ子どもっぽい猫だなあ。

などと思いつつ見てると、その猫は常識知らずなのか、そのまま道路へと飛び出す勢いだ。

——おい、

——おいおいッ

いちるは思わず身を乗り出した。

『ちっ』

いきなり悪態をつかれたが、不満はこちらにあるのだといちるは主張したい気分だった。

『予定にないことはマジでやめていただきたい。あ～俺様の仕事、増やすなよな』

いま、いちるの目の前にいる言葉も態度も悪い人物……いや、猫は自称天使だという。それが（確かに背中に翼もあるし、浮いてるし、頭の上には光る輪っかもあるけど）腕組みをして、いちるを睨んでいる。が、姿は間違いなくブチ猫である。

「あのさ、さっきから全っ然説明になってないし！！ちょっと、責任者とかいないの？！」

『責任者はいない。責任猫ならいないでもないが』

こんな形で話が脱線に脱線を重ねる。というのも、いちるにも原因があるのだが、とにかくこの猫の言葉と態度にはいちいち苛々させられる。だからいちるは「そういう屁理屈はいいから！！」とついつい突っかかってしまうのだ。

『そもそも、あんたが余計なことするからだろが。行橋いちる』

「うげ。なんで私の名前知ってるの？」

『そりゃまあ、俺様、天使だし？』

なんで語尾がはてなマーク？

この似非天使は、先ほど突然、いちるの目の前に現れた——と、いちるは思っているのだが、似非天使曰く、いきなり現れたのはいちるの方だという。何故か、と聞くとこんな説明だった。

『俺様は猫界の天使様であるからして、人間界では肩身狭い猫たちが不遇の事故で死んでしまった場合、猫天国に案内する役割が俺様にはある。んで、俺様の管轄で今朝、一匹の若い猫が車にはねられて死ぬはずだった。だから迎えに来たのに、現れたのは人間、お前だったってわけだ。おわかり？』

わかるわけがあるかッ！

しかし、いちるは今、交通事故にあったことは間違いない。なにせ、いちるの眼下にはその惨状が広がっている。自分の死体を見下ろすなんて、気分の良いものではない。そして自分自身の今の姿は、見えない。意識は遙か上空で、要するにこれは昇天している最中ということだろうか。現実目の前に広がり、それを突きつけられているのにもかかわらず、いちるはそれを理解できない。いや、理解したくはない。

『ああ、面倒だな』

目の前の似非天使は、いかにも嫌そうに項垂れた。

『人間の魂は管轄外だ。どうしてくれんだ、これ』

「どうしてくれんだって。それは私の台詞！！」

『あん？何言ってんだ。自分から車の前に躍り出といて。お前は死んだ。俺様は従来の仕事が無くなった他、面倒に巻き込まれようとしている。お互い不幸だな』

と猫はへへへと気の抜けるような笑いをした。

「『お互い不幸だな（猫の顔真似付き。魂だけの存在となった私に表情があるのかは疑問だけど）』で済むかあああ！！私は！？あんたの話聞いてると、私が死ぬのは予定外ってことでしょ！どうにかなんないの？」

『そもそも、お前が飛び出さなきゃ良かったんだよ』

「私だって、そうしようと思った訳じゃないんだよ。こう、なんていうか、おお、猫よ、危ないぞってふらぁ〜っと。てか、お陰で猫は助かったでしょうが。猫族として私に一頃お礼言っただいんじゃないの、似非天使」

『猫族う？はぁ、お前馬鹿？では聞くが、人間は身内でもない人間が他種族に助けられてありがたいって言うのか』

「う、それは……えっと、そもそも人間は他種族に助けられてなんて……」

『よく言うよ、犬訓練して身の回りの世話させたりしてる奴だっているし、お前だって牛肉も喰えば牛乳、飲むだろ。それで他種族に助けられてない、なんて言えるか？』

なんだ、この猫。やけに人間界に詳しいじゃないか。

こんなやりとりをしている間に、眼下では救急車が到着した。事故に遭って数分。日本の消防庁は優秀だ。ぐったりとしたいちるは救急車に搬送されていく。

「ああ、私の身体がっ！」

最悪だ、最悪。誰だ、私の運勢が最下位だなんて占ったのは。このまま死んだら呪ってやる。

そんないちるの心境など慮ってはくれない猫天使は、へらへらしている。

『あーあ。魂がここにあるんだから、蘇生しねえのにな』

「そうそうそう、それ！！！」

いちるはピーンと閃いた。指があつたら、猫天使をズビッと指さしていたに違いない。

「私の魂を身体に戻せばいいんじゃない。私が死ぬのって予定外だったんでしょ。できないの？」

『んん〜、人間の魂管理は知らないゆえに、あんたの死が予定内か外かは知らない。んでもって、蘇生とかそういうことはできるできないで言えばCANだ』

回りくどい上に何故そこだけ英語、という疑問はとりあえずしまっておく。

『でもなあ、こっちにもオトナの世界ってのががあるんだよ。手続きが面倒だし、魂が抜けたってことは死んだことに間違いない。予定外でも、あんたの身体はほっとけば腐って土に還る。そうしたら戻る身体もねえわな。手続きしてる間にそうなっちゃうのがオチだ』

「で、でも！」

といちるは諦めない。諦められるはずがない。

予定外と言われているのに。こんなはずじゃないのに。

「できることはできるんだね？じゃあ時間がかかろうがやってみなきゃわかんないじゃん！やってよ、お願い！！」

猫天使は面倒臭そうに鼻をほじった。

あ、猫も鼻をほじるんだ。なんてシュールな絵だろう。

『面倒臭えけど、仕方ない。あんたを人間側に渡す方が面倒だもんな一。要は、死ななきゃ良い

んだろ？』

「あ、ありがとう！猫天使！！」

そしていちるの目の前が強い光でいっぱいになった。

あー、最初はびっくりしたけど、これで何事もなかったように普通の生活が送れる……！

と、思うのも早かったし、猫天使にありがとうと言ったのは間違いだったと、いちるはこの直後、思い知らされる。

その日は雨が降っていた。

家の前には傘をさした人たちが窮屈そうに行き来している。それをいちるは少し離れたところからぼうっと見ていた。自分の家に、これだけ来客があるのは初めて見たので、まるで自分の家ではないように見える。実際、もう“自分の家”とは言い難いのかも知れない。

猫天使が言った『要は死ななきゃ良いんだな』。

確かに猫天使はいちるを生き返らせてくれた。しかし——、

「...いちるう.....」

同じ高校のクラスメイトや部活の先輩後輩、そして先生がちょうど今、行橋家にやってきた。すでに数人の友達は泣いているようで、嗚咽が聞こえてきたが、顔は傘に隠れて見えない。

そう、今日は行橋いちるの葬儀だ。

いちるという人間は結局死んだ。しかし、いちるという魂はまだ死んでいなかった。だからこそ、いちるは自分の葬儀を見ている。なんとも不思議な気持ちである。悲しいのと虚しいのと憤りと。それが一緒くたになった、といってわかってくれる人はどれくらいいるだろう。だけれど、それを聞く術はいちるにはもうないのだ。

行橋家の狭い玄関には、地味な傘がわらわらと集まり、周囲には白黒の幕、そして空は曇天と、いちるの視野はまさにモノクロである。なんて地味な世界なのだろう。つい、そう思わされる。

いちるは雨に濡れながら、じいっとその地味な世界を見つめ続けた。

猫天使があのだとした処理はこうだった。

ふわふわとしていて、なんだか変な感じに暖かかった魂だけのいちるは、重力にでも引っ張られるようにググッと降下していった。そして、すんと何かに収まった。五感が急に正常に戻り、一気に周囲の情報が頭に流れてくる感覚で、一瞬頭がピリッと痛くなった。そしてガンガンと痛みが後を引く。思わず目をつむっていたいちるはそおっと目を開いた。すると、やけに視界が低い。人だかりが激しい中で、人の足ばかりが見える。

あれ？私ってまだ道路に横たわってるの？救急車に搬送されたんじゃないかなったっけ.....。

そして感覚の戻った足でぐっと立ち上がろうとして——、立てなかった。

おや、と思って足を見ると、茶色い毛並みが見えた。

おやおや、と思ってよく自分の体を見ると、なんと先ほど助けた猫の体になっていた。

『うまくいったな』

声の方に顔をあげると空中に浮かぶぶち猫の姿。猫天使である。

『約束通り、これで死なないぞ』

(ちょ、ちょっと待ってよッ！)

と言ったつもりが声は出ない。当然だ。猫は人語をしゃべらない。それでもテレパシーなのか、猫天使にはいちるの声が聞こえていた。

『あん？不服か。約束は守ったぞ』

（不服だらけだよ！誰が猫に生き返らせてって言ったのさ）

『でも人間になりたーい、なんて一言も言ってなかったじゃねーか』

（普通、生き返るって言ったら元の体にでしようが）

『でも俺様はこれで予定通りの仕事できた』

へ？と思ってよく見ると、猫天使の周囲を小さな光が彷徨っている。

（それってもしかして……）

『おうよ、その体に入ってたもともとの魂』

（ね、ね、猫の魂と入れ替えたってこと～？！）

『あたりい〜』

と猫天使はへらへら笑う。

（こ、こいつ、私がせっかく助けた猫の魂を結局殺したってこと？こんの、悪魔ッ！）

『悪魔じゃなくて、俺様は天使だっつーの』

その後、仕事があるからと猫天使……もとい猫悪魔は天空へと姿を消した。

かくして、猫の姿となってしまういちるは、一応家まで戻ってみたものの、自分の葬儀を見るという現在の状況へ至った。

いちるの視界は白か黒という地味な姿しか映らない。まるで、これから先のことを暗示しているかというような色合いだ。そして、いちる自身は一人、いや一匹、この白黒の世界の中で茶色である。

それがまた、世界に置き去りにされたようで惨めだった。

少し離れたところから玄関先を見る。

高校から来たご一行は、ひとまず焼香を終えたようで一人二人と帰っていく。担任の先生が玄関を出たところに、喪服姿の母が出てきて、何やら声をかけたのちにお互いが頭を下げた。そして担任は去っていく。それを母は見送りをしているわけだが、心ここに非ずといった風にただぼうっと眺めているだけなのが、いちるから見てもわかった。何しろ、この雨の中で傘もささずに玄関を出てきているわけだし。

(やっぱり……、ショックではあるんだろうなあ)

そんな母の姿を見たいちるは、ただそう思った。

何せ、自分自身、死んでしまったことはショックなのだ。

まだ人生十六年という自分の死を悼んでくれる人が、こんなにもいるのかと思うと、嬉しいやら悲しいやら。

そして段々、切なくなってきた。

いちるは、高校関係者がもういなくなったのを確認して、その場を離れた。家に残っているのはもう親戚だけだろう。

猫になると不思議なもので、動くとすぐに体があったかくなる。しとしとと降る雨は、体温を奪ってしまいそうなのに、体を覆う毛がそうさせない。皮膚が直接濡れるような感触はなかった。ただ、顔などに水滴がついて視界が悪くなる。どこかで雨宿りをしようと考えていると、そういえば公園が近くにあったなと思いだして、そちらに向かった。

普段は小学生がよく遊んでいる公園だが、平日の昼間、しかも雨という条件の中、公園で遊ぶ愚か者はいない。

いちるはベンチを見つけて、その下に潜り込んだ。そこで体をぶるぶるっと震わせる。

体毛についた滴が周囲に飛び散った。

———なんか……ほんとうに猫みたいな行動……

こうやって、理性を失っていくんだろうか。そう考えるととても怖かった。

泣きたい。叫びたい。誰か、気づいて——ッ！

そう思った時だった。

足音が聞こえた。少し引きずるように歩いているのか、公園の砂がザッザッと音を鳴らす。

いちるは思わず、ベンチの下で体を小さくした。

そしてその足音は、どうしたわけか、濡れているはずのベンチに腰を掛けたのである。いちるの場所からは足元しか見えないが、頭上ギシギシとなったので間違いないだろう。これも足元からの判断だが、男のようだ。黒い革靴を履いている。いや、これは高校生がよく履くローファーではないだろうか。

いちるはベンチの後方に出て、そろりそろりと横に回った。ベンチの陰から顔だけ出して、足の主を確認する。

(ああ、やっぱり……)

そこには、傘もささずにただ雨に濡れたまま俯いている高校男子の姿があった。学ラン姿というのは、どの学校かは判別しにくいだが、間違いなくいちるの同級生だろうと思った。俯いている姿が、そう思わせた。

顔は俯いているせいで誰だかわからない。背格好は、猫になってしまったいちるの距離感が変わったためにわからないし、髪型に関しては雨でぐっしょり濡れていてわからない。だから、いちるはそろりそろりと、その高校男子に近づいた。長い足を開いて、その膝あたりに腕が添えられている。添えられていると言うより、上半身を支えているように見える。そうやって、まるで地面に覆い被さるような高校男子。その下にいちるは潜り込んだのだ。

誰だろう。

ただ、そんな興味が先走って覗いたのだが。

(あ……)

視線が合った。

そして突然、抱きかかえられた。

（うわわわ……ッ）

突然のことに、いちるは思わず身を振った。いちるを抱く腕の力がふと緩んで、その束縛から逃げるように飛び出した。しなやかな猫の体は、綺麗な弧を描いて地面に着地する。猫の距離感からすると、かなり高いところから飛び降りたのに、着地の衝撃はほとんどなかった。

「あ……」

高校男子の残念そうな声。

そんな声を出されても。

いちるはベンチの下に再び潜り込んだ。潜り込んだ後で、

（今の……本当に猫の行動だなあ。あたし、猫になっちゃったんだなあ）

という思いが強くなった。初めの頃は信じられなかったし、見た目は猫でもころはいちるだ。そう思っていたのに。強い意志とは何だろう。いちるの気持ちはすでに大きく揺らいでいた。

頭上がまたギシギシとなった。高校男子が立ち上がったのだ。

と思うとすぐに屈んで、ベンチの下をのぞき込んだ。

うう、何だよコイツ。いま流行りの猫好き男子か？！巷に猫カフェだってできてるもん。でも私は見世物じゃないぞ、高校男子！

そう訴えることができたらどんなに良いだろう。しかし出たのは「ミャー」というか細い声だけだった。高校男子が微笑む。おや、といちるが思っていると、ふゅっと口笛を吹いた。おいで、と呼んでいるのだとわかった。

少し迷ったが、高校男子の方がおそろおそろと言った感じで手を差し伸べた。その手が少し震えているようにも見える。そう言えば、さっき抱き上げられたとき、冷たかったなと思い出した。濡れている所為もだるのだろうか。

そうだ、なぜこの男子は傘を差さないのだろう。持ってないと言うことはあるまい。昨夜からしとしとと降っていたのだから。

いちるはゆっくりとその手に近づいた。今度は不用意に手の方から近づいてくる気配もない。安心して、その指先が触れるところまで接近してみた。向こうも不安なのだろうか。すぐには触れてこない。いちるはまた一步近づいてみた。それでも触れてこないものだから、高校男子の指先のおいを嗅ぐ真似をしてみた。雨に濡れてにおいは落ちているが、かすかに線香の香りがする。

その線香の香りがする手が、ついにいちるを撫でた。やはり、冷たい手だった。

（この人、きっと私の知り合いだろーな。葬式、来たうちの一人か。顔がよく見えないや。誰だろ）

いちるは手の中に進んで入っていった。高校男子がもう一度、抱き上げる。今度はじっくりと顔を見た。

（ありゃ。浅木君）

同じクラスの、出席番号栄えある一番。浅木悠翔。

スポーツ少年で、クラスのイベントがあるとムードメーカーとなってまとめ上げる人気者。いちると悠翔は同じ体育委員だ。だけど、正直言ってそれくらいの間柄。去年は違うクラスだったし、中学はもちろん、違う。委員会のときに喋ることはあっても、体育の時間は男女別になるので、同じ委員会に入っているにも授業毎に打合せとかはなし。だから、クラスの一男子として、他の男子と同等の扱いをいちるはしている。その悠翔が、

（泣いてる……のかな……？）

雨で顔が濡れているのかもしれない。しかし、確実にその顔は濡れていた。

「野良か？この公園に住んでるのかな」

「ミャー（いやいや、浅木君、私の声が届かないもんかな）」

「ああ、」

と悠翔はキョロキョロし始めた。

おや、まさか本当に声が届いたのかな？

そう思ったのもつかの間、悠翔はいちるを抱きかかえたまま、滑り台の方へと向かった。この公園の滑り台は、半円形ドームにいくつか穴が開いていて、階段と滑り台も付属しているという構造だ。つまり、かまくらみたいに中に入って遊ぶことができる。悠翔はその中に入った。対象年齢がきわめて低い遊具だけに、ドームの中に入るための穴は小さい。悠翔は穴に頭から突っ込んで、這うように中に入った。そのとき、いちるは悠翔の手から離れて先に中に入った。

「よっと……。ここなら濡れないな」

悠翔が手についた砂を払う。いちるも、体を震わせて水滴を飛ばした。その様子を見た悠翔がかすかに笑った。

「子猫だからかな。あんま人間を警戒しないのな」

ああ、といちるは落胆した。やっぱり、いちるの声は誰にも届かないんだ。

全身が濡れきっている悠翔は、手についた砂を払うのをあきらめて、地べたに座り込んだ。制服が汚れることにも頓着していないようだ。座り込んだ悠翔は、その膝をとんとんと叩いた。いちるはそこに飛び乗った。

「ほんと、物怖じしないな。家が近かったら飼いたいところだけど。俺んち、ここから電車で四十分くらいだし。電車に猫、乗せたらまずいだろうなー。ゲージかなんかに入れないとだめかな」

悠翔はそんなことをぶつぶつ言い始めた。

おいおい、ホントに飼う気かよ！

あ、でもそしたら、ご飯の問題は解消するなあ。私も考えがたくましくなったもんだ。くそう。猫天使め、次に会ったらどう罵ってくれよう。

いちるは、猫であることを徐々に受け入れようとしていた。

「俺な、」

と悠斗はひとり、喋り始めた。

いちるはと言うと、悠斗の膝の上で丸くなっている。そのいちるを、悠斗は包み込むようにやさしく撫でながら語りだした。

「あの日、どうして動けなかったんだろうって、思うんだ」

何のことだろう、といちるは少し顔を上げる。悠斗の視線は空を彷徨っている。

「あの日、行橋が道路に飛び出すのが、スロー再生みたいに見えたんだ。俺は行橋の肩に手をかけられるくらい、すぐ後ろにいてさ。んで、お前みたいな子猫が道路にススッと寄ってくるのも見えたわけ。行橋がさ、その猫を助けようとして……いや、実際どうかな。吸い込まれるように動いていったから、ほとんど反射だったのかも。結果として、子猫は助かって、行橋が死んだ」

ああ、といちるは心の中で嘆息した。

悠斗は、いちるの事故をすごく近くで見ていたのだ。ショックだったのだろう。いちるが子猫を助けたように、いちるを助ける位置にいたのは悠斗だったのだ。その結果、いちるは子猫を助けるために動き、悠斗はいちるの行動が見えていたのに動けなかった。

『あなたは——、親友のために命を賭けることができますか？』

ドラマのCMのキャッチフレーズ。それがふと頭をよぎった。

別に親友ではなかったけど。だけど、目の前で人死にがあれば、思わずにはいられない。

——どうして助けられなかったのか

——でも、あの場合は仕方ない。一瞬のことだったのだから

——でも一番近くにいたのに？手を伸ばして、その肩を抑えられれば

——だけど、

悠斗の中で、そんな押し問答が繰り返されたのかもしれない。あくまでいちるの想像だ。悠斗の気持ちはこんな単純ではないだろう。心中を察しようと思えば思うほど、いちるの中に苦いものが広がる。

所詮、人は自分本位だ。いちるが悠斗の気持ちを押し量ったところで、それは悠斗のためではない。そうすることで、私はあなたのことをこんなに思っていますよというアピールに過ぎない。

葬式だってそうだ。今日来た高校関係者たちは、どれだけいちるの気持ちを押し量ったのだろう。

かわいそうだね、死んでしまっ。て。だろう。か。

子猫なんかのために死んでしまうなんて、とんだお人よしだね。だろう。か。

若いのに死んでしまっ。て。無念だろうね。だろう。か。

どれもこれも、いちるの勝手な想像だが、どれをとってもいちるの気持ちに近いものはない。かわいそうだ、とか、善人だった、とか、無念だ、とか。親だったら、あんなに良い子だった

のに、だろうか。どれも同情で、だけどいちるに近づいてすらいけない気持ち。そう、いちるに今、もっとも近い気持ちを持っているとしたら——、

「俺、どうしていいか、わかんなかった。今日だって、」

悠斗は、いちるの聞く聞かないに関わらず、とつとつと語る。

「今日だって、俺は何のために来たのか。焼香の時に、行橋の両親に頭下げられて。違うだろ、て思った。頭下げるのは俺のほうだよ。止められなくて、すんませんでしたって」

（違うよ、違う。浅木君は悪くないって）

そう言えたところで、傷の舐め合いになるだろうことも頭では理解できる。だけれど、今の状況はあまりにも理不尽だ。

（猫天使！責任とれよ、この状況！！）

そうやって腹は立つのに、悠斗が優しく撫でるものだから、意に反していちるは次第に眠くなっていった。

そういえば、冷たかった手もだんだん温かくなってきたなあ。

あ。

気づくと、いちるは一人だった。いや、正確には一匹というべきか。

滑り台の下、ドームの中。砂はまだ湿っているが、冷たくはない。そんなに時間は経過していないのだろうが。

いちるは急いで外に出た。曇天は相変わらずだが、雨は上がっていた。足跡、というほどでもないが、滑り台下ドームから誰かが出て行ったような跡が残っている。どうやら、悠斗は帰ったようだ。

迂闊。寝ちゃった。

だけれど、いちるは猫になってからほとんど寝ていなかった。

交通事故があったのは、学校近く。いちるの家から学校までは、電車で十五分という道のりだ。そこから、子猫の足で家まで丸一日かけて歩いたのだ。お腹も空いたが、生ゴミを漁るという真似だけはしたくないという人間のプライドが残っていて、睡眠だけでなく食事もないまま、三日が経過したのだ。

三日目。自宅で葬式が行われた。それが今日なのだ。

雨はいちるにとって、恵みの雨で、飢えはどうにもならないが、これで渴きが解消された。そして睡眠。悠斗の膝の上という安心感か、温もりか。うっかり寝てしまった。だけれど、これもいちるの睡眠不足を解消した。あとは飢えだ。

（やっぱり、浅木君に飼ってもらうかー、もしくは家に押しかけるかな）

両親が猫アレルギーとかいう話は聞いたことがないから、いちる（人間としての体という意味であって、心ではない）が死んでしまった悲しさに付け込んでやるか。そんな強かな考えが湧いて出たとき——。

『おうよ、様になってるじゃねーか』

振り返ると、滑り台の上にぶち猫が浮いていた。

「ニャー！（お前、この猫天使！いや、猫悪魔—————！）」

『威嚇も様になってるじゃねーか。逆毛ってそういうのを言うんだぜ』

相も変わらず、へらへらと笑うそのシュールな姿に、イライラが募るいちるであった。

滑り台のてっぺんに腰掛け、腕を組んでいる姿はまた可笑しい……というよりシュールだ。本当は足も組みたいようだが、あの短い足では叶わないだろう。

「ニ` ャニ` ャー（んで、どうしてこの期に及んで、そのバカ面をさらしに来たのかな）」
『すげー嫌われようだな。あとお前、わざわざ声にしなくていいぞ。聴こえてるから。喧しいって、近所のおやじにつまみ出されても知らねーから』

そう言われて、いちるはキョロキョロを周りを見た。雨上がりの公園。誰もいないが、確かに猫の喧嘩ってるさい。『聴こえる』とは、心の声が、という解釈でいいだろうか。便利機能、というよりプライベート侵害じゃあ。そんなことを言っても始まらないけど。

（うるさいのはお前のほうだろ！）

『俺様は天使であるからして、一般人には声も聞こえなければ、姿も見えましょーん』

む……ムカツク。なんだろう、この史上最強のイライラは。

『おおっと。お前と喋ってるとどうも要件を忘れがちになっちゃうなあ』

勝手に忘れてろ。断じて私のせいではない。

『あんな、実はちょいとまずいことになって』

自業自得だ、馬鹿野郎。いや、馬鹿猫。

『……お前、心の声、ダダ漏れだぞ』

そうって猫天使はため息をついた。別にダダ漏れだろうが、構うもんか。そんな気持ちで、いちるはぷいと、そっぽを向く。その様子を見て、猫天使はもう一度ため息。

『話進めっけど。まずいことっつーのは、俺がしたことに対してお咎めがあってさー』

ほほう。そりゃいい気味だ。

（じゃ何？私を元に戻せば許してくれるって、閻魔様かなんかが言ってるの？）

『お前の頭も凡庸だなー。閻魔様？そんなのいるわけねーじゃん』

天使がいるのに、か。天使が閻魔様の存在を否定するなんてな。

『違って。警察がさ、動こうとしてるの。裁判になったらまずいから、口裏合わせてくんね？』

（はあ？？？！）

警察。裁判。

飛び出てきた単語はいやに現実的だが、最後が納得いかない。なぜ猫天使のために口裏を合わせにやらんのだ。そう反論しようとする間もなく、件の猫警察がやってきた。不思議なことに、日本でもよく見かけるおまわりさんのコスプレをした、白猫だ。頭には赤の回転灯が乗っている。その白猫が、猫天使同様、空から降ってきたのだ。ファンファンと回転灯を回しながら。

『おや、こんなところにいましたか。猫天使さん』

『こちとら、忙しいもんで』

ほう、と呟いて猫警察の白猫は目を細めた。

何をいきなりいがみ合っているんだ、とどぎまぎしていたら、猫警察はいちるに目を留め、
『あなたが行橋いちるさんで間違いありませんね』

そう聞いていた。だからこくと頷く。なぜか、猫天使のいちるを見る目が陰しい。対して、猫警察は満足そうに頷く。そして、ポケットから何やら折りたたんだ紙を取り出し、おもむろに広げて読み始めた。

『六月五日、八時七分。〇〇交差点にて、茶色い子猫を自動車という走る間の手から救い、代わりの犠牲となった。この事実間違いは？』

（ありませんとも）

『これは不測の事態として処理され、猫天使により魂の入れ替えが行われた。この事実？』

（間違いありま——）『あるだろッ！』

いちるの答えに、猫天使がいきなり言葉をかぶせてきた。

『間違い大アリだ！事実だけを押し通そうとすんじゃねえ！不測の事態で行橋いちるが死んだ。こいつは死にたくないと言ったんだ。それに、魂の辻褄が合わなくなるだろ。だから、俺様はアフターケアとして魂の入れ替えをしたんだ。あくまでケアだ、ケ・ア』

（ちょっと待ってよ！）

いちるも大慌てで反論する。猫天使が口の形だけで『馬鹿』と言ったのがわかったが、止まってるもんか。口裏なんて合わせない。いちるは、猫警察に向かって言った。

（確かに、死にたくなくて頼んだけど、誰も猫の体に魂入れて、なんて頼んでない！私は元の体に戻りたかったの！！）

そう言葉にしてしまったから、いちるはどっと涙が溢れてきて自分で驚いた。

戻りたかったのだ、自分の体に。

戻りたかったのだ、自分の日常に。

だけれど、戻る体はもうないのだ。その事実を、初めて認識してしまった。葬式を見てはいたが、傍観者だった。まるで、誰か知らない人の葬式を見るような目で見ていた。そうやって、自分が死んでしまった事実から目を背けていたのだろう。けれど、もう背けられない。自分で言ってしまったから。元の体に戻りたかった、と。過去形で。それは即ち、戻れないことを認識しての発言だ。

（ああ——、うわ————ッ！）

いちるは顔を伏せた。口からはふゅーふゅーとせわしく息が漏れる。閉じた目から、涙がこぼれた。猫も、泣けるんだ。そんなことを思いながら。

『あの、その、ええっと——』

猫警察の慌てふためく声が聞こえた。そんなことに頓着せず、いちるは泣き続けた。

『ええっと、戻れますけど……』

そうだ、もう戻れ……って、え……？今、なんとおっしゃいました？？

いちるはおそろおそと顔を上げた。猫警察は困ったように顔を掻いた。

『あのですね、ですから、元の体に戻れます。希望されますか？』

（もちろん！）

即答。そして猫天使の舌打ち。お前、なんなんだよ。

（あの、でも、どうして？）

そうですね、と猫警察は呟いて、事の顛末を教えてくれた。

チュンチュンという小鳥のさえずりが聞こえてきそうな、爽やかな朝。

少しずつ暑くなってきている六月半ば、この日は梅雨真っ只中という時期にありながら珍しく朝から晴れていたのだ。いちるは屋上に出てラジオ体操でもしたい気分だが、まだ体の節々が痛む。外傷はほとんどないけれど、ずっと寝たきりだったのが、やはり響いているのだ。それでも、生きているということを実感できる。そのことにしみじみと感謝をしながら、いちるはあの時のことを思い出した。

『実はですね、』

猫警察である白猫は腕を組んだ。なんなんだ、この猫たちは。短い腕でどうしてそうも組みたがる。

『あなたは外傷による死ではなく、ショック死です。あ、でも強いて言うなら脳死でしょうか。魂が抜けたので、脳幹は機能していないはずですし』

（ってことは、どういうことですか？）

脳幹がどうのと言われたところで、いちるにはよくわからない。結論だけを教えておくれ。

『ですから、今現在は行橋いちるさん、あなたの体は病院で保管されてます』

（ほえ？）

どうしてそうなるんだか。そのあたりもちゃんと猫警察は説明してくれた。猫天使とは違って優しい。

『脳死という判断のもと、ドナーに臓器を提供すべく待機、といった形ですね』

（ドナー？臓器提供？）

確かに、脳死と言えばそうなるが。ということは、生き返るチャンスはまだあるのか。それも、急がなければならないようだ。

（じゃあ、生き返れるってことですよ？！）

『ええ、十分以内に体に戻れば』

（十分！！なんでそんな急な……）

『法的に脳死という判定が下されるまでに、時間がかかったのが幸いしましたね。実は今も、法的には脳死となってません。臨床判断です。ですが、法的に脳死と判断されれば直ちに心臓摘出が行われますから。あと十分。私の見立てでは、それくらいしたら手続きが完了します』

あとで知ったことだが、臓器提供の意思がある人のみ、脳死判定をするような。日本では法的な判断と臨床判断があって、臓器提供に踏み切るためには法的判断とそれに伴う手続きが必要だと。いちるの一家はみんなドナーカードを持っている。それでだろう。だけど、あと十分とは……。

（わ、わかったから！じゃ、急ごう！）

猫警察は頷き、猫天使は悪態をついた。

これも後から知った話だが、ぶち猫の猫天使は営業成績が悪かったと。天使の営業成績って

何だ、と思ったが、要するに彷徨える魂を天国に送る仕事で、猫天使はその仕事をさぼりがち。次サボったら地獄に送るぞ、と言われていたよう。だから、どうしても彷徨える猫の魂を見つたくて。

だけど、人間の方が多いい世の中。探せど探せど、猫よりも人間の魂ばかりを見るという。そんなとき、猫天使の目の前でいちるの交通事故。猫天使は、ピーンと思いついてしまったらしい。魂を入れ替えることを。

これは犯罪だそうで、どこからどういうメスが入ったかは、いちるの知るところではないが、とにかく捜査が始まって、いちるのところにも警察が来た。ま、その直前に猫天使も来たけど。しかも口裏合わせろ、だなんて。必死だな。そこで必死になるくらいなら、普段の仕事から必死になれよ！

そんな経緯もあって、いちるは生き返ることができた。

魂が体に戻ったとき、本当に焦った。まさか、心臓摘出直前だったとは。

いちるの目が開いたのを見て、担当医師は度肝を抜いたという。ついでに驚きすぎてぎっくり腰にもなったそう。いちるの脳死判定に関わった医師たちは皆、一様にして首をかしげたらしい。それもそうだろう。脳死からの回復例は日本にはない。実は、いちるの件が外部に漏れると、脳死に反対する集団に叩かれるとか。だから、いちるの事は「脳死ではなく植物状態だった。医師の判断ミスだ」ということになっているらしい。大人の世界はややこしい上にくだらない。

いちるは、事故から一週間たった今も病室だ。はじめの日は手術と検査。次の二日は人工呼吸器をつけての脳死判定期間。そして今は、検査入院だ。長引いているのは、やっぱり脳死からの回復なのか、植物状態だったのか、未だに医師間でも迷いがあるようで。たとえ植物状態だとしても、脳の機能が死んでいたことになるから後遺症なども懸念されている。

いちるの知らないところで医者はやきもきしているが、いちるはお陰様で元気だ。ただ、三日間寝たきりだった分、筋力は落ちたし、ご飯も食べてなかったから体力もなくなった。検査入院といいつつ、回復期間としての入院でもある。だが、元気は元気なのでとても暇だ。

ああ～、と大きなあくびをしたところで、ノックが聞こえた。

「どーぞ」

ノックの後にすぐに入ってこない。誰だろう、といちるは首をかしげた。家族は遠慮がないからノックはしないし、医者や看護師だって、ノック後すぐに入ってくる。別に面会謝絶ではないから、誰かお見舞いに来てくれたのだろう。

あと、いちるは脳死と言うことになっていたため、病院としては変な情報が外部に漏れるのを嫌ってか、いちるは個室なのだ。暇な病人が集まると、ぺらぺらお喋りを始める。人の口にはフタはできない。それを恐れたのだろう。どっちにしろ、いちるとしては気ままに過ごせるのでありがたい。そこにノックだ。間違いなくいちるのお見舞いに来てくれたのだろう。

わくわくした気持ちでドアの方を見ていると、

「あ、浅木君？」

少しばつが悪そうな顔をした浅木悠翔が現れた。手には、見てそれと分かる果物入りのビニール袋。

「今、いいか？」

そう言って恐る恐る入室。いちるは上体を起こして、ベッドの上に座り直した。

「ようこそ浅木君。わたしゃ、暇で死にそうなところでした」

それを聞いて、ホッとしたのか、いちるのベッド脇まですたすた歩いてきた。これ、とだけ言ってビニール袋を渡してきたので遠慮なくいただく。いちるはベッド脇の椅子を勧めた。

「なんか……思ってたより元気そうだな？」

「まーね。ところで今日はなんで？学校は？」

「あ？体育祭の振替休日だけど」

「え？あ！」

忘れていた。そうだ、この前の土曜日、確かに体育祭があったはずだ。体育委員であるいちるも、その準備のため忙しく動き回っていたではないか。ショックだ一、とベッドに突っ伏すと、悠翔は別の意味で嘆く。

「行橋がいなくて、うちのクラスは大変だったんだぞ。女子の分の仕事、俺が全部引き受けてさ。当日だって行橋の仕事の穴埋めはほとんど俺。他の体育委員にも分配してほしかったけど、クラス対抗じゃあ他には任せられない部分もあるし。俺、すげーやりずらかったんだから」

「うう。ごめん。でも仕方ないしー。それに私、今回は団旗持つ役じゃん。やりたかったあー」

「ホントは代理体育委員を立てるって話もあったけど。最初は行橋が死んだってことだっただろ？クラスじゃ代理立てる空気じゃなくて。だっておまえの机の上、一輪挿し置いてあったんだぜ？それが医者の判断ミスって」

「あー、なんかソレ、滑稽」

いちるはふと、猫だったときに家じゃなく学校に行けばよかったかな、なんて思った。まあ、あのときはやっぱり、死んでるって設定だから、学校の様子を見て楽しむ余裕なんてなかっただろうけど。

「また担任がさ、行橋んちからそういう連絡受けてたのに、体育祭前日まで言わないんだぜ？なんでも、沈んだ空気が充満したクラスに、それはそれは言いづらかったと」

だろうねぇ、といちるは担任に同情する。

「それで今まで誰もお見舞いに来てくれなかったわけかー。浅木君が第一号」

「ん、んー。そうだな、報告も兼ねてってことなんだけど」

報告、と聞くと、優勝した、と言返ってきた。それを聞くと、体育祭に出れなかったことが余計悔やまれる。

「多分、数日間の暗い空気を吹っ飛ばすっていうか、要するに誰も元気出せなかったわけだろ。それが一転、生きてる、だもんなー。みんな一気に元気になって」

これはあとで学校に出た後、いちるが友達に聞いた話。

悠翔は体育祭当日の朝、クラスで円陣を組んでこう言ったそう。

『行橋に優勝報告してやるぞッ！』『オーッ！！』

そして実際、優勝した。なんとも健気な、といちるとしては微笑ましいやら嬉しいやら。

さらに、いちるが生きてると聞いて一番様子が変わったのが悠翔。とこれも友達談。

そりゃあ、ね。

事情を知っているだけに、いちるはそこを笑ってはぐらかした。それ以来、クラスで変な噂が立ったのは言うまでもない。ただ、悠翔もいちるも、それを気にしなかった。

あ、そうだ、と悠翔が何かを思い出したと指を鳴らした。

「俺、猫飼うことにしたんだよ」

「猫？なぜわざわざ。それも私に報告すべき事かな？」

意地悪っぽく聞くと、悠翔の方は至ってまじめに頷く。

「茶色い子猫なんだけどさ」

と、そこで「おや？」と思ったいちるである。

「行橋んちの近くの公園で見つけて」

（おやおや、これは……）

「人なつっこいやつでさ。野良みたいだし、二日前くらいからかな、飼うことにしたんだ」

（二日前って……体育祭の日じゃないか）

わざわざ、あの公園にまた出向いたのか。そしてふと、あの雨の日の葬式を思い出す。あのときに、悠翔の告白を茶色い子猫になったいちるは聞いたのだ。

「行橋さ、事故に遭ったのは猫を助けようとして、だろ。それでかな、なんとなくその……子猫が気になって」

「あんまり……気に病んじゃだめだよ」

悠翔が「は？」というのも構わず、いちるは続けた。

「意外と浅木君ってナイーブだよな」

「何をもってして、そー思うわけ？」

「秘密♪」

猫天使

<http://p.booklog.jp/book/13236>

著者：木住 和

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/SusanBrown/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13236>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/13236>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.